

エッセイ

# 続 アイ・ラブ・パリ

松村 茂治

## 第五話 一枚の絵を追って

フランスの旅から帰って一年ほど経ったある秋の日、私  
たちは、箱根を目指して車を走らせることになった。紅葉  
にはまだいくらか早い時期、家を出るときには日差しに暖  
かさが感じられたが、山に入ると風はずいぶん冷たかつ  
た。

箱根でその絵が見られることを知ったのは、この小旅行  
の一月ほど前のことである。テレビの美術館紹介番組を見

ていて、偶然に知ったのだった。そのときは、単純に、

「あの絵が日本に来るのだ・・・」と思っただが、それ  
はいささか早合点だった。しかしながら、「あの絵」と聞  
いて、旧知の友に会えるような気分になり、何としても見  
に行きたい、いや、見に行かなければ・・・と思っただ  
が、この思いを理解していただくためには、いささか前置  
きの長い話におつき合い願わなければならない。一昨年  
のフランス旅行から続く話なのである。

フランスの地図を広げると、どういうわけか、目は自

然とパリから北の方に向いてしまう。セーヌ川がそちらに

向かって流れているからだろうか。モーパッサンがノルマ  
ンディーの出身だったからだろうか。永井荷風が初めてこ  
の地を踏んだのがルーアブルの港だったこと、高橋治の  
「風の盆恋歌」が、ノルマンディーのフェキヤンから始  
まったこと、そして、地図の上ではそこからそれほど遠く  
ない所に、カトリーヌ・ドヌーブ主演のミュージカル映画  
の舞台となったシェルブルの港があることなど、この地  
方には、私の個人的な感情を刺激するものがいくつもある。

そういうわけで、何となく、北の方に行ってみようと  
いう風には考えてはいたけれど、ルーアンに行くことに決  
めたのは、行く前の日になってのことである。パリのホテ  
ルでガイドブックと地図を広げ、そこなら余裕を持って列  
車で日帰りができると判断したのである。その地に、明確な  
アテや目的があったわけではない。ルーアンについて知っ  
ていることと言えば、ジャンヌ・ダルクが火刑に処せられ  
た所ということくらいだった。敬愛する荷風先生は、ニュ  
ーヨークからルーアブルに到着し、パリに向かうことにな  
るが、それがルーアン経由だったということに気づいたの  
は、ずつと後になってからのことである。

後になってからと言えば、こんなこともあった。

日本を出る前、旅行会社のK氏に、「パリから日帰り  
できる所で、ノルマンディー方面に良いところはないろ  
うか」と持ちかけたことがあった。ルーアブルもルーアン  
も、旅のプロのお勧めルートには入っていなかったらしく、  
「その方面だったら、ジヴェルニーはどうでしょう・・・  
。」という答えが返ってきたのだが、悲しいかな、ジヴェ  
ルニーの何たるかが分かかっていなかったために、頓珍漢な  
受け答えをしているうちに、その話は立ち消えになってし  
まったのだった。

しかしながら、皮肉なことに、ジヴェルニーに寄らず、  
ルーアンまで足を延ばしたことが、結果的に、モネを身近  
に感じるようになり、箱根行へとつながったのである。

先にも記したように、ルーアンに行ってみようと思っ  
たのは、そこがジャンヌ・ダルク縁の地だったからである  
が、だからと言ってジャンヌ・ダルクのことをよく知って  
いたという訳ではない。フランスの歴史上の人物でその名  
を知っている何人かのうちの一人が、ジャンヌ・ダルク  
だったというだけのことのである。もっとも、子どものこ

ろからジャンヌ・ダルクについては「ルーアンの少女」ではなく、「オルレアンの少女」として記憶してきたはずで、それは世界的に彼女がそう呼ばれているか、少なくともそうしたタイトルの本があったからだと思う。おそらく、昔読んだ本に、彼女が、ルーアンで火刑に処せられたということも記されていたのだろう。大人になってから手に入れたブーテ・ド・モンベルの美しい絵本「ジャンヌ・ダルク」の結末近くに、「・・・ルーアンの監獄につながれたのです。・・・判決がで、ジャンヌは背教の異端者としてルーアンのヴィユ・マルシェ広場で生きながらに火にかけられることになりました・・・」（矢川澄子訳・ホルプ出版）とある。ジャンヌ・ダルクとオルレアンとルーアンは、ワンセットなのだ。

列車の時間に合わせて行動するというのではなく、間に合った列車を利用するという気ままな旅なので、パリから大した距離でもないのに、ルーアンに着いたときには、いくらか昼を過ぎていた。駅前の売店でサンドウィッチとジュースを買って昼食をとりながら、地図でヴィユ・マルシェ広場を確認して、出発することになった。はつきりと

した目的があるわけではないが、ここまで来たのだから何はともあれ、ジャンヌ・ダルクの痕跡くらいは探さなければならぬ・・・。

駅前から、真つすぐ南に延びている大通りは、その名もずばりジャンヌ・ダルク通り。この通りを十五分ほど行った所に、ヴィユ・マルシェ広場への案内があり、路地を入ると、雰囲気たっぷりの、つまり、ヨーロッパの古い街でよく見かける木組みの家が軒を連ね、その奥に、件の広場が現れたのである。帰国してから見直したのだが、ブーテ・ド・モンベルの絵本の最後の頁には、広場の中央で火刑に処せられるジャンヌ・ダルクの姿が描かれていて、その背景の街並みは、見て来た通りの木組みの家になって

いる。  
長い年月にわたる上からの重みに耐えかねてのことと思われるが、一階部分の木組みがひしゃげて、今にも崩落しそうなになった建物があつたり、「モーパッサン」の看板を掲げたカフェがあつたりと気になるところがあるのだけ、まずはジャンヌ・ダルク・・・と思い、彼女の名前の付された教会に入ってみたのだが、普通の教会と特に変わったところはないようだった。教会を出て、周囲をぐる

ぐる回っていると、広場の裏側に当たるようなところに、

小さな花壇とその中央に背の高い十字架を見つけ、十字架の足元に置いてある看板の説明を読んで、そこが火刑の地であること知ったのだが、その気になって探さなければ見落としてしまいそうなところで、ここでは、ジャンヌ・ダルクは、ずいぶんと冷遇されているような感じだった。彼女について調べていて、「ジャンヌ・ダルク祭」なるイベントが毎年行われていて、そのパレードは圧巻という説明を見つけたのだが、それはルーアンではなく、オルレアンで行われるとのことであった。ここでは、救国の戦死を殺してしまつた訳だから、どこか、後ろめたいところがあるのかもしれない。

地図には、教会の他に、彼女の名前のついた施設として、ジャンヌ・ダルク記念館があるように出ているけれど、その場所が良く分からず、結局は行けずじまいだった。これも、帰ってきてから調べてみると、確かに広場に面して記念館はあるが、土産物屋の入り口と区別がつきにくく見落としたがちであるとあつた。その土産物屋の前は行つたり来たりしたはずだから、まさに、ガイドブックに書いてある通りのことをやってきたということになる。そういうこ

とからも、彼女は絶対に冷遇されていると思う。

駅からやってきた旅行者を、ジャンヌ・ダルク通りからヴィユ・マルシェ広場へと導いてきた路地は、大時計通りと言わらしい。広場からその路地を戻って、ジャンヌ・ダルク通りを渡るとその先に、狭い路地をまたぐようにして建てられた建物（時計塔）があり、それが、この路地の名前の由来となっているようだった。大時計は、岡本太郎を思い出させるような太陽を模した独特のデザインをしている。時計の下まで来て、見上げていると、地元の年輩の方が、時計と建物に掘られた彫刻について説明をしてくれたのだが、十分には理解できなかった。

大時計通りを抜けたところにある大聖堂が、次の目的地なのだが、ジャンヌ・ダルクに対するのと同様、そこに積極的な思いがあつた訳ではない。「オルレアンの少女」と同じように、「ルーアンの大聖堂」という言葉が頭の片隅に残っていて、それに導かれてここまでやってきたのだが、その言葉が、いつ頃、何をきっかけに記憶に残るようになったのかはつきりしない。

時計台を過ぎて少し行つた所で、今さらというかどうかどう

してここでというか、目を疑うような光景に出くわすことになった。比較的かつぶくのいい中年と思われる男が、石畳の路地に四つん這いになって物乞いをしているのだが、その両手足の関節が常人のものとは反対向きになっているようで（ジロジロ見る訳にもいかないので定かではないのだが）、それで四つん這い以外の姿勢は取れないようなのだ。改めて、この国の国旗は自由・平等・博愛を表しているたのではなかったかと思うのである。子どもの頃、お祭りで出かけた神社で目にした白装束の傷痕軍人の姿を思い出したのであるが、あまり適切な連想ではなかったのかも知れない。

男の前でゆっくり足を止めている訳にもいかず、半ば、人の流れに身を任せるようにして進むと、路地の先に聖堂らしき建物が見えてきた。路地の中からは、手前の建物に遮られて、正面の壁のごく一部分しか見ることはできない。路地を出れば、全体が見渡せるのだろうか足を速めて広場に出てみると、広場が十分にはなかったのだと言ったらしいのだろうか、聖堂があまりにも大きかったからと言うべきなのだろうか、一目で聖堂全体を視野に入れることは容易ではない。だから大聖堂なのと言われるれば、納得

するしかない。

それにしても・・・と思うのである。トラックもクレームもない時代に、石を材料にしてこれだけの（といっても具体的には伝わらないが、一番高い塔は、優に百メートルは超えていると思われる）建造物を造ったという事実には感服するのであるが、そもそも、これだけの物を造ろう、造れるはずだと発想したことに、人の力を超えたものの存在を感じないわけにはいかない。

驚くべきは大きさだけではない。正面の壁一面を覆っている、聖人像やその周囲を飾っている彫刻（これらは、塑像だろうか）の精密さにも目が奪われる。聖堂の大きさから推測すれば、像の一つ一つはかなりの大きさと思われるが、まるで細密画を見ているかのようである。こうした石の造形が、夏の日を浴びて白く輝き、窪みには真つ黒い陰を作りだして、シャープなコントラストを伴って迫ってくる。

大聖堂にはどれくらいの時間いただろう。中に入ってステンドグラスを見たり、暗い回廊を巡りながら横たえられた石造を眺めたりしてしばらく過ぎた後、隣のカフェで一休みして、聖堂を裏から見ると言う路地を辿って駅に

向かったのだった。途中に、もう一つ聖堂があって、そこは建物を外から見上げただけだったのだが、それでも帰ってみると、この日見た二つの聖堂が、互いに干渉しあうのか、両方の記憶が曖昧になっているのを感じるのである。

ルーアン訪問から数日経って、というより、フランス旅行も間もなく終わるといふ頃になって、いわば、今回の旅の仕上げとでもいった意味を込めて、オルセー美術館に足を向けたのである。これまでの記述から、私たちが、パリについてもフランスについても、ほとんど何も知らない人たちであるということは、ご理解いただけたと思う。オルセーについても同様で、ここに印象派の絵画が集められているということは、言葉としては知ってはいるものの、具体的にどんな画家のどのような作品が集められているかは、ほとんど分かっていなかった。

セザンヌ、ルノアール、ドガ、スーラ・・・と、どこかで一度は目にしたことのある作品に、まるで美術の教科書を見ているような思いを抱きながら歩を進めていたのだが、そろそろ足に疲れを感じはじめた頃、いくらか明りを落とした部屋の一画で、その絵と巡り合ったのである。

美術の専門家なら、何号サイズのと云うのだろうか、素人としては、横七、八十センチ、縦百センチほどのとしか言えない、それくらいの大きさのキャンバスに、見覚えのある建物が、忽然と現われたのである。もちろん、一目見て理解した訳ではない。ニワカ美術愛好家の悲しい性で、絵を丹念に鑑賞するよりも先に、説明書きに目が行ってしまうのである。そこに、「ルーアンのカテドラル」の文字を見、もう一度絵を眺め、説明書きにもう一度目をやり・・・という一連の動作の後、少し離れたところにいた妻に声をかけたのだった。

「ねえ、これ・・・」と促すと、

近づいてきて、はじめキャンバスに目を遣り、その視線を説明書きに移し、もう一度、絵に向けるという、私と同じ動作を繰り返し、

「あの大聖堂だわ・・・どうしてここに？誰が描いたの？」

「クロード・モネって書いてある。印象派だから、ここにあっておかしくないけど、こういう作品があるなんて知らなかったねえ・・・」

「睡蓮だけではなかったのね・・・」と、何とも情け

ない会話となったのである。

聖堂の絵は全部で四点あった（と記憶しているが、妻は五点ではなかったかと言っている）。絵はどれも、ほぼ同じ位置から描かれたらしく、つまり、私たちが大時計通りから広場に出たときに見たのとほぼ同じ構図で描かれている。正面入り口上部の円形のバラ窓とその手前の二等辺三角形の構造物、画面には入りきらない左右の塔などは聖堂を思い起こさせるものではあるが、全体から受ける印象は、実物とはずいぶん異なる。

実際の聖堂は石造りの建物で、見るからに重厚・硬質、しかも、陽のあたっている部分と影になった部分が、鋭いコントラストを作っていたのが印象的だった。

それに対して、キャンバスの上の聖堂は、霧の中から浮かび上がって来たような、輪郭の曖昧なところが特徴的で、砂か粘土で出来ているような、柔らかい印象を与えている。それでいて確かな存在感をもって迫って来るのが不思議だった。

四つの聖堂は、季節によって、時刻によって変化する太陽からの光を反射して、青みがかっていたり茶色が強調

でのんびりと遅い昼食をとったりしていたため、美術館に着いたときには、閉館時間を気にしなければならぬような時刻になっていた。

はやる気持ちを押さえながら、船遊びに興ずる二人の少女を描いた大作、刈り取った藁を積んだ田園風景、睡蓮の池・・・と歩を進め、広い展示室から隔離されたようなコーナーに展示されていたその絵を見つけたのだった。確かにそれはルーアンの大聖堂に間違いのないのだが、オルセーで見て来た聖堂とはまったく異なった聖堂だった。オルセーの聖堂はどれも暗い色調のものだったが、この聖堂の上半分には日の光が当たっていて、淡い薔薇色に輝いている。これは、いつの季節の、何時頃の光を捉えたものなのだろう。違いは色調だけではない、建物の輪郭がオルセーのものより一層曖昧になっていて、聖堂が光の中に溶け込んでしまいうさやみである。専門家に聞くと、聖堂作品を描いた頃、モネの視力はかなり落ちていて、よく見えていなかったのではないかとのことだった。外界がこの絵のように見えていたということなのだろうか、あるいは、肉体の目で見えない風景を、心の目で見えていたということなのだろうか。一つのモチーフを、このように、いく様にも描き

されていたりと、色調を変化させている。同じ建物を同じ位置から描いていて、それぞれが独立した作品に仕上がっているのである。実物を前にして描いているのだから、写生画の範疇に入るであろうが、写実的な絵というのとは大分違う。画家は、聖堂を描いているのではなく、聖堂をキャンバスにして、移ろいゆく日の光を描いているのだと思う。この絵を見て・・・正確に言えば、帰ってから、聖堂の写真とこの絵の写真を見比べながら、この絵が印象派の画家の手になるということが、少し理解できたように思うのである。

先を急ごう。私たちは、モネに導かれて、箱根に向かっているのだった。

そこには、印象派の絵画が数多く集められているというのだが、見たいのはただ一点、ルーアンの大聖堂である。はじめのうちは、オルセーで見た絵が来ているのかと思っていたけれど、聖堂の絵は三十数点あり、箱根にあるのはオルセーのものとは別物であることは分かっていた。

箱根の山に入って間もなく道に迷ってしまい、分かる所まで戻らなくてはならなくなったり、宮ノ下の老舗旅館

分ける画家の感覚の鋭さ、繊細さに、改めて驚きと尊敬の念を抱いたのである。

ルーアンに行っていなかったら、オルセーの大聖堂の絵の前は素通りしていただろうと思うし、無論、箱根まで出かけてくることもなかっただろう。ちょっとした偶然が、絵を丹念に見る機会を与えてくれることになり、一人の画家を、身近に感じさせてくれることになった。聖堂だけではなく、同じ画家の手になる「サン ラザール駅」についても同様だ。一昨年、私たちはこの駅からルーアンに向かったのだが、調べてみると、モネは、サン ラザール駅をモチーフに何点かの絵を描いているという。プラットホームから、駅舎に向かって煙を吐きながら入ってくる蒸気機関車を描いた代表作とも言える作品はオルセーで見えてきたが、箱根にも、別の場所から描いたサン ラザールの絵が展示されていた。この駅を利用していなければ、この絵の前で長く足を止め、オルセーの絵と比較してみることもなかったろう。絵を丹念に見ることができるようになるためには、現場に行ってみなければならぬという訳ではないが、絵の一つの見方を教えられたような旅だった。

第六話 パリ スケッチ

恨みの塔、または、旅番組の正しい見方

パリにしばらく滞在していたにも拘わらず、エッフェル塔に登っていないなどというと、それではパリに行ったことにはならないと言われそうである。でも、私たちは、パリに一週間以上いたにも拘わらず、エッフェル塔には登っていないのである。妻は、エッフェル塔には行ってもいいし見てもいいと言っているが、これはやや大げさな、というよりは事実に対する物言いである。

着いた日の午後、さっそくセーヌ川遊覧の船に乗って、パリの景観を楽しんだ。船は、塔のすぐ下を通るので、塔の展望台からこちらを眺めている人たちを、船上からしっかり眺め返してきた。塔のすぐ近くまでは行っているのである。妻が言いたいのは、パリにやり残してきたことがあるので、もう一度連れて行ってもらいたいということなのである。

ろそろ暗くなるというのに、展望台へのエレベーターを待つ人が行列を作っている。何時間待ちになるのかは分からず、徒歩で階段を登るといふ選択肢があったのかもしれないが、待つことも、徒歩で登ることもしたくはなかった。係のお姉さんに、朝はいつからやっているのか訪ねてみると、朝九時からの営業と教えてくれた。だったら、明日か明後日、美術館に行くついでに・・・と、そのまま塔の下を通り抜けて、反対側の地下鉄の駅に向かったのだ。フランスに「塔より団子」という格言があったことを思い出し、夕食の方を優先した訳だが、これがいけなかった。

翌日からは、ルーブル、オルセー、オランジュリーと、朝から美術館巡りをする事になり、悪い予感はある。もので、「いつでも行ける・・・」は「結局は行けない・・・」という結果になってしまったのだ。エッフェル塔に登っていないというのは、そういうことなのがある。

帰ってから知ったことだけれど、エッフェル塔は夜間、壮麗に電飾・ライトアップされているので、わざわざそれを見に来る人もいるという。夜空にそびえる電飾の塔

普段よく通る道沿いに気になる店を見つけて、いつか寄ってみようと思いついて、いつでも寄れると思っているうち、一年、二年と経ってしまい、気がついたらお目当ての店がなくなっていたという事は、ときに経験することである。だから、数日パリを離れていて、戻ってきた日の夕方、老躯にはやや強行軍ではあったが、夏のパリ、暗くなるまでには時間があるからと、出かけることにしたのである。地下鉄で二、三駅行って乗り換えれば、すぐに最寄り駅。地上に出ると、薄暗くなりかけた空をバックに塔が優美な姿を見せていた。

イエナ橋を渡って真下まで来ると、この塔が、鋼鉄製の堅固な建造物というよりは、紙か樹脂でできた繊細な工芸品のような感じがしてくる。「鉄のレース」と表現されるのももつともなことと思う。しかしながら、一八八九年の万国博覧会の開催に際して造られた、この優美な建造物は、当時、伝統的なパリの景観を台無しにする」と酷評され（その先鋒の一人がモーパーッサンだったと聞くが）、取り壊しも取りざたされたというのだから分らない。

人の流れに乗るようにして塔の下まで来てみると、それを眺めたあと、展望台まで登ってそこからパリの夜景を楽しむのは、人気の観光コースになっているらしく、昼間行つたつてつまらないでしょうと言う人もいるが、パリ初心者としては、暗くなったら盛り場などうろつかなというの、ここでの正しい過ごし方と考えていたのだ。帰ってからTVの旅番組を見るたびに、私たちはパリに何を見に行つて来たのかと、我が身の不甲斐なさを恥じるのである。

それにしても、TVには、何と旅番組の多いことか。なかでもフランスを扱ったものは、圧倒的に多いような気がする。行ってきたばかりなので、そう思うのかもしれないが、聞くところによると、日本に観光に来る外国人が、年間約一千万人であるのに対し、フランスには八千万人が訪れるということだから、フランスを特集するのは、番組の作り方としてはやや安易な気はするが、安全パイということになるのだろう。

番組が多いということは、見る人も多いということだが、私たちは、どうして旅番組に興味を持つのだろうか。単なる暇つぶしということもある、他に見るべき番組がない、ストーリーを追うドラマは面倒など、いくつも理

由は思いつく。もちろん、まだ見ぬ国や街を疑似体験して、旅情をかき立てる・・・つまり、来るべき旅への動機づけのためにということもあるだろう。旅行会社が番組のスポンサーになっているのは、番組が潜在的な顧客を開拓することになるからだ。

しかし、旅番組にはもっと別の見方があるように思えてならない。私たちは、旅番組を見ると、まだ行ったことのない所を特集したものでより、行って来た所を特集したものに目が向きがちなのではないだろうか。フランスの旅から帰って、フランス特集が多いと感じるのもそのためだ。私たちは、次の旅行に備えて見るのではなく、そこへ行って来たということを確認するために、旅番組を見ているように思えてならないのである。

もう少し正確に言うなら、良い旅をしてきた、そこに行つたのは間違いでなかったと思いたいために、旅番組を見ているように思うのである。自分たちの行って来た街がテレビで取り上げられるということは、そこが、他とは違った特別な街であるということの証なのだ。しかも、プロの取った映像は、ときに、実物よりも迫力があつたり美しかったりする。そうした映像を見ることで、

私たちは自分たちの選択が正しかったことを実感できるのである。

フランスを特集した番組では、たとえそれがパリを特集したものでなくても、とりえずエッフェル塔と凱旋門とセーヌ川が映し出される。これらは、「フランス三種の神器」と呼ばれ、少なくともその一つを盛り込まなければ、フランス紹介番組としては公認されないということは誰もが知っているところである。テレビに映し出される映像は、プロの手になるものだから、「鉄のレース」は、まるで絹の織物のように映し出されるのである。パリで見えてきた風景を、もう一度、より美しい映像で見ること、大きな安堵感を得ることができるのである。

しかしながら、夜空に輝く塔は、空から宝石をまき散らしたような絢爛たる映像となるのだが、これを眺める私と妻の心中は穏やかではない。番組によっては、ご丁寧にも、展望台までカメラを上げて、パリの街を俯瞰したりするのだが、これはいけない。

私たちは、パリで経験したことが、良い経験だったと思いたくて旅番組を見ているのである。TVカメラが、

エッフェル塔の下を素通りするだけならよろしい。私たちは、そのようにエッフェル塔を体験してきたのだから。私たちと同じことをテレビがやってくれれば、それがエッフェル塔の正しい経験の仕方と理解するのである。しかし、私たちは、展望台には登って来なかったし、電飾の塔も見て来なかった。この事実は重い。そういう事実を背負った者にとり、「展望台からの眺めはサイコーです！」などというハイテンションのナレーションは、許し難いことこの上ない。私たちのパリ体験が、全面的に否定されたような気持ちになるのだ。「夜空に浮かぶ、イルミネーションの塔は、何とロマンチックなんでしょう」などという陳腐・軽薄な言葉を耳にしたら、即座にテレビのスイッチは切ってやる・・・と思っ込んではいれるものの、時すでに遅しなのである。ライトアップされた恨みの塔の映像はすっかり網膜に焼き付いてしまっているのだから。そうした事実に向かうために、すべきことは一つしかないようである。

### 墓地は素敵なところ

妻から「明日、何処に行こう?」と聞かれて、「モンパ

ルナスかモンマルトルの墓地はどうだろう」と答えたのだが、ここまで来て、どうして墓地に行かなければならないのか、というのが妻の素朴な疑問で、まあ、当然と言えば当然の疑問である。私としても、特に墓地でなければならぬということでもなく、この日、デパートで見た、ブランド品を買いあさる東洋人の群れを見て、自分たちもあの仲間と思われているのかと想像すると、できるだけ、そういう人たちと一緒にするような所は避けたいと思つたのである。

決して墓地が好きなのではない。どちらかと言えば、子どもの頃から臆病で、学校帰りに、同じ方向へ帰る仲間と道草をしていると、ときに、肝試しのつもりか、一人ずつ時間をずらして、墓地を抜けて帰ろうなどと言いつつ輩がいて、マズイ奴と帰ることになってしまったと思うのだが、そういうときに限って、誰かが見ている、翌日には決まって、担任の先生から呼び出しを受けることになり、「泣きつ面にボチ」となるのだった・・・ああ、のっけから話が逸れてしまった。

妻からの問いかけに、「墓地」と答えたのには、荷風先生の「ふらんす物語」を読んだことが強く影響している。

そこには、墓地を舞台にした美しい文章が載っているのだ。

主人公が、「椿姫」の墓に参拝しようとしてモンマルトルの墓地を訪ねたときのことである。墓所の在処が分からず迷っていると、雨が降り出した。おりしも、そこへ近道をしようとして墓地に入って来た訳ありの美女二人、ローザとニノンが雨宿りよろしく、主人公の傘の下に身を寄せる。椿姫の墓所の在処を尋ねられ、そこまで主人公を案内したローザは、椿姫の事情に疎いニノンに、蘊蓄を傾ける……。

物語るローザ、聞き入るニノン、一人は、花束の花、落ちて散り敷く青き苔の上に、その長き裾を引き立て立ちたり。一人は濡れたる墓石に肱つきて、やさしき指に美しきその頬をささえたり。われ独り、地にかがまりいて、高く仰げば、一双の嬌態画を敷きて、曇れる空に雲動き、鳥飛ぶ時、雨の雫枝より落つ。わが胸には、一味の幽愁、春の夜の笛の如くに流れたり。

ローザ、ニノン、二人は右と左よりわが腕を取りぬ。歩調そろえて歩む時、二人が裾はわが身の左右に、焰と見ゆる芍薬の花の如く揺らめきて、名娼の墳墓、忽ち見失われぬ。ああ、さらば、椿の姫よ。希くば……

トル墓地が舞台だった。

散歩に来た男が、真新しい墓石に跪いて嗚咽を漏らす喪服の女に目を留め、声をかける。男は、一人では歩けないほどの悲嘆に暮れる未亡人を、抱きかかえるようにして家まで送って行き、その日のうちに関係ができるが、つき合いは長くは続かなかった。

しばらくして、女に会いたくなつた男は、モンマルトルに行けば会えるかもしれないと思い、出掛けてみると、案の定……見覚えのある喪服の女が、男に抱きかかえられるようにしてやって来るのだった。

残念ながらと言おうか、ありがたいことと言おうか、私の近くには真新しい墓石もなく、女の嗚咽も聞こえて来なかった。

同じような話が、トルーマン・カポーティの短編にあった。「楽園への小道」である。妻を亡くした男が、その墓所を訪れると、いつの間近づいたのか、中年にさしかかったと思われる女が声をかけてくる。男よりやや大柄な地味な感じの女で、彼の好みのタイプである。熱心に話しかけてくるところから、一瞬「墓場での亭主あさり」との

選ばれた言葉の艶やかさ、文章のリズムの心地よさ……このような文章に接すると、自分で書くのが切なくなってくる。しかし、続けなければならない……。

墓地へは、高架式になった表通りからは、階段を下りて行くことになる。そこは、周囲の建物の陰になっている上に、丈の高い木々に覆われていて、薄暗い上にひんやりとしている。苔むした石の世界には生活者がいないのだから、熱を発するものがないのである。そうした物理的なことはともかく、墓地は、洋の東西を問わず、冷氣・靈気の漂う場所なのである。

見上げれば、大きな木に遮られて定かではないが、雨の降る気配はなく、バッグの中に傘が入っているが、出番はなさそうだ。雨が降らなければ、ローザもニノンもお出ましにならないのだろう。足音が聞こえる方へ目を遣ると、黒服の紳士が足早に通り過ぎて行つた。繁華街と住宅地を結ぶ近道になっているのは、昔も今も変わらないようだ。

モーパッサンの短編「墓場の女」も、ここ、モンマル

疑念を抱くが、女のくつろいだ感じに、そのことはいつしか忘れてしまう。しかし、一向に自分の元を去らないどころか、自宅での食事にまで誘ってくる女に、忘れかけた疑念が再び頭をもたげてくる……。そして、ようやくのことで、その場を立ち去ろうとする男に、問わず語りに、女は新聞の死亡広告と墓地が、自分を幸せに導く可能性を秘めた場所であることを告白するのだった……

この短編を読んで、「墓地での亭主あさり」という言葉が、普通名詞としてさらりと使われていることに衝撃を覚えた。さらりと使われるということは、この言葉で表現される行為が広く行われている、あるいはその存在を誰もが知っているということを意味している。少なくともアメリカではそうなのだ。我が国の作家の書いたものの中には、この種のエピソードが織り込まれた作品はあるのだろうか。ないとするなら、それは宗教や文化の違いによるということになるのだろうか。神のもとに召されてしまえば、二度と戻ってこない死者たちと、盆だの彼岸だの何回忌だのと、しょっちゅう現世との交流に引っぱり出させる死者たちとは、墓地での住み心地はずいぶん違っているにちがいない。

ない。

### もう一つの美術館

大学が間もなく夏休みに入ろうという頃、暗くなりかけた停留所でバスを待っていると、同僚のA氏が通りかかったのである。帰りの挨拶をしたつもりが、どちらから誘うともなく、駅前でちよつと寄って行こうということになり、気がつくとも目黒駅近くの焼き鳥屋のカウンターで肩を並べていたのである。

特に、相談をしなければならないようなことがあったわけではなく、当たり障りのない四方山話がひとしきり続いた後、「休みにはどこかへ・・・？」と尋ねられたのである。その問いかけを待っていたことを悟られないよう、しかも初めてのフランス行きということもあって、遠慮がちに、「フランスへちよつと・・・」と答えたのである。

美術教育を専門にするA氏は、もちろんパリ経験者で、私が初めて耳にするような美術館の名前をいくつも挙げたあと、「一週間くらいの滞在だと、ルーブル・オルセー・オランジュリーの御三家だけで精いっぱいかもしれないけど、せめてここだけは・・・」と教えてくれたのがモロー

美術館だった。

ギュスタヴ・モローの名前は、どこかで聞いた覚えはあるものの、彼がどんな絵を描いたかは全く覚えがなかった。だから、A氏の説明に対して、要領を得ない受け答えをしていたのだらう、美術館行きの前に「予習」が必要と感じたA氏は、数日後、研究室まで、美術雑誌のコピーを届けてくれたのだった。それを見て、モローが宗教あるいは神話に題材を取った絵を多数描いていることを知ったのだが、モロー美術館に行ってみようと思ったのは、彼の絵に興味を持ったからというよりは、そこが、宿泊していたホテルから、歩いても行けるような距離にあったからである。いや、もう少し正直なところを告白すれば、その手前に有名なデパートがあって、そこに行つたついでに足を伸ばすことにしたのである。

美術館は、大通りから路地に入り、急な坂を少し登つた所にあつた。そこは、元々、モローが自宅兼アトリエとして使っていた建物で、特に、美術館風のエントランスもなければ、それらしい看板も備えていないので、気づかず

だった。質素な石造りの四、五階建ての建物の一階部分に、ぼつかりと穴が開いたような一画があつて、そこが入り口だった。よく見ると、脇の壁に小さな表札がはめ込まれていたけど、個人の住まいを示す表札と思われてもしかたないようなものだった。

ここが本当に美術館なのかと疑いたくなるような、薄暗い入り口を入り、受付を済ませて、狭い階段を上がつていくと、確かに、ここで人が生活をしていたことを忍ばせる部屋がいくつあつて、作品よりもそちらの方に興味を覚える。パリに特に知り合いがいる訳ではない私たちのような旅行者にとつて、この地のアパルトマンを体験できる貴重な機会と思うからである。

ベッドが置いてある部屋の窓際に、係の人がいたので、「あのベッドは、モローが使っていたものなのか？」と尋ねると、「小さいでしょう。モローは、大変、小柄だったので。」「と教えてくれた。本当に、子ども用と思えるような大きさのベッドだった。

観光客が出入りできるところに、キッチンや浴室があつたかどうか、覚えていない。薄暗い狭い階段でつな

がった部屋がいくつあつて、年取つた体には決して快適な住み心地とは言えないが、雰囲気のある居住空間であることは間違いない。

その狭い階段を上つて行くと、あれは四階だったらうか、大きな広間があつて、そこが展示室になつていた。四方の壁全体に、大小取り混ぜて、夥しい数の作品が展示されているのだが、どれも、気持ち晴れやかになったり、その絵の世界に飛び込んでみたくなつたりするのは対極にあるものばかりだった。一言で言えば、重厚な感じのする作風ということになるのだが、それは、題材が、男の生首、詩人の亡骸、死の天使・・・と死をモチーフにしたものが多い上に、そうしたモチーフを生かすべく、チューブから出した絵の具（この当時の絵の具がチューブに入っていたのかどうか知らないが）をそのまま塗りつけたような、おどろおどろしい作風に仕上がっているからだろう。

A氏が届けてくれたコピーには、「幻想的な作風」という形容があつて、確かに、どれもこの世に存在しないものばかりを描いているので、「幻想」という表現に間違いはないのだが、我々が「ファンタジー」と呼んでいるものとは異質で、むしろ「観念的な作風」と言つた方が適切で

ある。

抽象画というジャンルのあることを知らない訳ではないが、絵といえ、半ば自動的に写生画を連想してしまうところがある。そして、上手い・下手を（そもそも、絵についてこのような判断をすること自体が誤りであるように思っている）かどうかで見てしまっている。知らず知らずのうちに、絵をそのように見てしまう者にとって、モローの絵は、どう見たらいいのか、何とも悩ましい。おそらく、モローは聖書をじっくり読んで、心に湧き上がってくるイメージをキャンバスに表していったのだらうと思うのだが、なぜ聖書の世界がそのような形になるのか、実感できないのである。

A氏のコピーによれば、モローは、印象派の代表的な画家たちより十歳ほど年長とある。つまり、印象派とほぼ同時代を生きたことになるわけだが、これほどまでに画風が異なっているというのが面白い。もっとも、絵画に限らず、芸術家は一人一人がユニークでなければやっていけない生業だから、異なっていて当然なのかもしれない。

印象派の画家の多くが、「印象・日の出」を筆頭に、だ程度では、容易に気持ちは動かない。町中の、交通の便の良い所、近くに誰もが行くような観光施設があつて、そこに行つたついでに寄れるような所にあるわけではないのだから。

しかしながら、それほど強い思いを抱いて行つたわけではない美術館が、時間が経つにつれ、懐かしさあるいは愛おしさに似た感情とともによみがえってくるのである。「パリの中で、もう一度行ってみたい場所は？」と問われたら、間違いなく、「モロー美術館」と答えるだらう。

そう答える理由の一つは、建物の凛とした佇まいやその静謐な雰囲気にもう一度触れてみたいと思うからであり、もちろん、一度見たのではよく訳が分からなかったモローの作品をもう一度あの場で見てみたいとも思っているからであるが、もう一つ、忘れてはならない理由がある。

モローの弟子の一人にジョルジュ・ルオーがいたことを教えてくれたのもA氏である。私は、ルオーについても特に詳しいわけではないが、ルオーには、ミゼレーレと題する、キリストの像ばかりを描いた一連の作品があり、その作品のかなりの枚数を、山梨県にある美術館が所蔵していることを教えてくれた友人がいて、昔、一緒に見に行つ

自然の日の光を浴びる人物や風景を描いているのに対して、モローは、別の描き方をしている。コピーには、「・・・自邸に閉じこもり、隠れるようにして制作を続けた」とある。彼は、印象派とは違ったやり方で、心に浮かび上がるイメージをキャンバスに定着させていったのだらう。同じ具象的な絵画でありながら、全く異なった方向を向いている・・・いや、異なった方向から具象にアプローチしていると言ふべきか。

広間をひと巡りするうちに、いささか疲れを感じ始めていたのだが、それは、アパルトマンの最上階まで上ってきたからということよりは、描かれているテーマの重さと描画法の厚重さに、圧倒されたことだったと思う。しかも、多くの作品が、人の背丈を越すような大きさなのである。階下で見たベッドを思い出し、小さな身体で、こうした大きな絵に取り組む姿を想像すると、一層、疲れがこみ上げてくるのだった。

モロー美術館へは、A氏のアドバイスがなかったら、決して足を伸ばすことはなかったらう。モローの作品に特別な思い入れがあれば別だが、ガイドブックの説明を読ん

たことがあつた。同じ宗教画でも、私は、ルオーのキリスト像の方に親しみを覚えるのだが、そのルオーがモロー美術館の初代館長だったというのだ。モローには失礼な言い方になるのかもしれないが、私は、美術館を巡りながら、どこかでルオーの姿を追っていたような気がしてならない。いや、ルオーだけではなく、ルオーのことを教えてくれた知人の思い出も一緒に追っていたような気がするのである。

完

お詫びと訂正・前号の「パリの小娘たち」で、荷風は「掏摸娘」と書いてスリと読ませていると書きましたが、荷風が書いたのは正確には「掏盗児」でした。私たちが遭遇した掏摸のほとんどが小娘たちだったので、勘違いをしたようです。エクス キューゼ モア メドモワゼル ドゥ パリ!